

博物館ノート

妙沢筆不動明王二童子像

絹本著色 三幅対 嘉慶元年（一三八七）
妙沢筆（各幅 縦一一・四セントル 横四〇・〇
セントル
県立博物館蔵

妙沢（一三〇九—一三八八）は南北朝時代の禪僧で、夢窓疎石の法嗣の一人である。

甲斐に生まれたが、のち京へ出て臨川寺、建仁寺、南禪寺、天龍寺などに歴住した。江戸時代に書かれた画人伝などによれば、一日一枚ずつ不動明王の画像を描くことを三十年あまり続けたといふ。

今日、妙沢の描いた不動明王像は数多く残っているが、それらの図様はみな同じである。ただし、不動明王独尊のものと、二童子像が付いて三幅対をなす形式のものがある。

館蔵の作品は二童子像の付くもの一つで、

中幅に宝剣と縄索を執る不動明王像、向かって右に矜羯羅童子像、左に嘲吒迦童子像を配する三幅対である。概ね墨で描かれているが、不動明王の火炎や目頭・目尻、童子の肉身や衣などに赤系の淡彩が施されている。水墨画のような、運筆の様々な効果を生かした表現が特色で、気迫のこもった画像を描き出している。中幅の上方に記された自贊によつて、妙沢示寂の前年に描かれたものであることがわかるが、同年の制作になる高野山・寿寧院本とともに、多くの妙沢画のなかでここに味わい深い最晩年の一作といえる。



嘲吒迦童子像



不動明王像



矜羯羅童子像